

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (四)

名古屋市立大高幼稚園



ただいま本屋はおやすみ

なつおとかずおが本屋をはじめた。そこへしゅうぞうが、

「入れて」

とやってきた。

「だめ、せまいから入れない」

といって、拒否している。しかし、しゅう

ぞうもあとになかなかひかず、

「どうしてだあ、そんなこといっていかんぞう」

「しゅうぞうちゃんなんか、ようやめた

あーっていって、あっちへ行ったり、こっ

ちへきたりしてばかりいるもん」

といいあっている。そういっているなつお自身も、そのような傾向があるのだが、やはり子ども同志の間でも、そういう子ども

の状態を、お互いによくつかみとっている

ということを感じた。

「よし、決闘だ」

とふたりでとつきみ合いをはじめたが、なかなか勝負がつかない。しばらくして気がすんだのか。

「じゃいいわ、だけどおふるには、一回しかはいっていかんよ」

と条件をつける。

「一回だけはいかん」

と、しゅうぞうが反発する。

「じゃ十回だよ」

ということ、双方納得し、ようやくしゅうぞうが、その場の中にはいることができた。屋根つきのふるを作り、本屋をするかたわらで、その中にもぐりこみ、かなり長い時間遊んでいた。ふるを作ったかずおはそれをあくまでもふるとしておきたいのにしゅうぞうは、そこを部屋にしてねるところにしたかったらしく、またそのことで意見が対立し、しゅうぞうはその仲間から抜け出していった。そのあとは、かずお・しんやを中心として、新しい顔ぶれが加わり

遊びがづづいていった。その中の一員に、入れてもらったなつおが、カメラを作ったことがきっかけとなって、その場の中の子どもは、全員製作コーナーでカメラを作りフィルムを入れて、写しまわっていた。はじめに遊んでいた本屋の店には、

「おやすみ」

の看板がかかげられていた。

◇ ◇

子どもたちが併行して、ちがった遊びをはじめるとき、いろいろ工夫するものだなと思った。

「カメラを作っているから、本屋はもうやめてしまったのだ」と教師はみてしまうことが多い。「おやすみ」の看板が示すように、子どもたちの意識は本屋にあり、その場を基点として遊びをひろげていくのである。カメラ作りが終ると、本屋がまた店をひらく。この過程は、遊びの指導をする上に、非常にたいせつなことではないだろう

か。また、子どもたちの会話の中から、子どもの世界のきびしき、楽しさを感じさせられ、遊びの指導のむづかしさを思った。

(四歳児 十二月二十日)

こまっちゃったわ

ふたりは、いっしょに登園してきたことがきっかけとなり、ままごとをやりはじめた。遊びはじめてそうそう、えみ子が、

「きみ子ちゃんね、わたしに赤ちゃんになれっていうんだよ。いやだもん」と教師に訴えてきた。きみ子は、自分のことを訴えに行つたのをみて、自分の考えをひっこめたらしく、やえ子やよしみも加えて、遊びを続けていた。しかし、しばらくすると、また四人がかたまつてすわりこみ

何かいいあっている。えみ子は、

「ごめんなさいしなきや、許してあげない」という。きみ子も、

「あんた、五歳のわたしにいばるき。」

などといいあっていたが、なかなかちがあかないようであった。どうなるのかと、しばらくようすを見ていると、えみ子が、

「バシー」ときみ子のほほをたたいた。

「なに、あんた」

と、きみ子もやりかえしたりしはじめたので、とめにはいった。

「えみ子ちゃん、手をだすのはやめなさい」とやえ子がいう。そのいい方が、日頃母親からいわれている調子そっくりで、おかしかった。

「どうして、けんかになっちゃったの？」

えい子もついていた紙のお金を、

「いけない」

ときみ子がいったことがきっかけのようであった。

「先生どっちが悪いと思う？」

とやえ子がきくのので、

「どうしてけんかになったのかよくわからないから……やえ子ちゃんは どう思う

の？」と逆に問いかえしてみた。

「うーん、きみ子ちゃんが悪いというときみ子ちゃんが泣いちゃうし……」

と困った顔をする。えみ子ときみ子が、いあっているとき、やえ子とよしみは、

「わたしたち責任ないもんね」

と顔を見合わせ、かかわりはないという態度を示していたが、いつもいっしょに遊んでいる友だちとして、両方の気持ちを思いやるという、やさしい面があるのだなと思つた。教師とよしみとやえ子と話している間に気持ちがおさまったらしく、えみ子は「じゃいいわ、ここからわかれるんだよ」と、積み木で仕切りをつけて、ままごとコーナーをわけた。ふたりずつのグループになり、ときどき交流しながら、四人が遊びをつづけていった。

◇ ◇

子どものけんかに対しては、どちらがよいか悪いか結論を出すことを急がず、教師

も真剣な態度で、子どもたちの話の中に入ることが大切であると思つた。

(四歳児 一月二十一日)

おひなさまとお話してたの

(その一)

よしみがひな壇の前でじっと立っている。教師がそばへいくと、

「おひなさまがお話しているのを聞いているの」という。教師が、

「どんなこと話したの？」

ときくと、

「よしみたちが、いなくなつてから、ひし餅たべるっていつてるよ」

それを聞いていたきみえが、

「あんたたち、うそいってはいかんよ。」

お人形はしゃべらんのだから」

と少し強い調子でいう。教師が、

「静かにしていると、ほら、何かお話ししてるのが聞こえてくるわ」

と聞こえてくるようなふりをする。

「聞こえてこないよ、そんなうそいっていかん」

といいはる。

◇ ◇

よしみのイメージはこわしたくないし、きみえのいうことも否定はできないし、こんなとき教師はどう子どもと対したらよいか困ってしまう。(四歳児 三月二日)

おひなさまとお話してたの

(その二)

きのうにひきつづきよしみがやえ子といっしょに、ひな壇の前に立っているので、教師が、

「おひなさまとどんな話してたの？」

ときくと、よしみは、

「あのね、おひなさまとほんとうに話をしてたのにきみえちゃんうそだつていうの」という。教師がさらに、

「そう、よしみちゃんには、おひなさまの話がきこえたのね」というと

「ひし餅食べなさいっていったら、よる食べますっていったの」

とよしみがいう。するとやえ子が

「幼稚園の子どもは、みんなおりこうになりなさいっていったの」

とほんとうに聞こえたという気持ちで話してくれた。

◇ ◇ ◇

ひな壇の前のひし餅がよほど気にかかったのかもれないが、おひなさまとこんな楽しい会話ができる子どもはうらやましいと思った。毎年おひなさまをみるたびにこの会話が思い出されることだろう。

(四歳児 三月三日)

ぬってもいい?

母の日のプレゼントを、製作(エプロン

に好きな絵をかく)していないすみおが、製作コーナーのまわりをうろうろしているので、

「すみお君もやらない?」

と誘うと、いすをもってきて腰かけた。

そして、

「ぬってもいい?」

ときく。どうして、改めてきくのだろうか。

「クラスの子どもは、いろいろなものを、マジックインキでかいているのだけれど、

自分は、そういったものがうまくかけない。ただ色をぬるだけでもいいのか?」と

いうことをきいたのではないだろうか。すみをは、うまくかけないという劣等感をもっているのだから、こういったことに取り組む

ことは、かなり苦痛であろうと思うのだが、

とにかくすみおが、やる気をみせてくれた

ことは、うれしく大切にしていきたい。

「いいんだよ、きれいにぬってあげてね」と声をかけると、ポケットのところは色を

かえ、一面にマジックインキでぬっていた。

◇ ◇ ◇

すみおにとっては、「かく」ということ

ばより、「ぬる」ということの方が負担が軽く、スムーズに取り組んでいけるのだ

ということを思った。そして、何かをかか

なくても、こういうやり方でもいいのだと

いうことで、すみをははこのエプロン作りに

喜んで取り組めたのではないかと思う。

「かく」、「ぬる」同じようなことばでも

子どもによっては非常な違いを感じている

ということにおどろき、なにげなく使うこ

とばの、その中に持っている、意味の重要

さを考えさせられたのである。貴重な経験

であったと思う。(五歳児 五月九日)

わたしのプレゼント

みち子は、長い期間欠席していたので、

きょうお母さんのプレゼント作りをした。

エプロンを仕上げたあと、紙をもってきて

貼紙をはったり、絵をかいたりしていた。

「先生、お母さんありがとうってかいて」というので、

「お母さんありがとうってかくのね」ときくと、

「このふちに、お母さんありがとうってかきましたってかくの」という。

「ありがとうございますじゃなくて、ましたなの？」

とききなおすと

「ありがとうございました」という。

◇ ◇ ◇

もう母の日がすんでしまったから、過去形になったのかどうかわからないが、おもしろいと思った。エプロンだけでなく、自分で考えて製作したものを、お母さんにプレゼントしようとする、この気持ちを大切にしたいと思う。みち子にとって、「エプ

ロンは、先生からお母さんへのプレゼントであって、自分からのプレゼントではない」と、思っているかもしれない。

(五歳児 五月十四日)

砂場は海

砂場で、ゆみ・たけお・まさこ・みつこが遊んでいた。教師が片付けであることを知らせにいくと、素足で遊んでいたたけおが教師のそばへやってきて、

「今度、うめぐみの子ども、みんなで貝ひろいに行くんだよ」という。

「お母さんといっしょ？」

「ううん、子どもだけ」

「子どもだけでは危ないからだめよ」

「だれかのお父さんか、お母さんがついていくの」

教師はお母さんたちの間で、貝ひろいに行くという、話し合いがあったのかと思っ

ていた。お弁当の時に、また、ゆみがその話の続きをしているので、

「お母さんたちが、そういう話をしてるの？」と聞く、

と聞く、

「ちがうよ、だけれどうちの車三台使えば、うめ組の子ども全部いけるよ」

という。よくよく話を聞いてみると、砂場を海にし、石を貝として遊んでいるうちにそれがいつの間にか、「みんなで貝ひろいにいこう」という話になったようである。

◇ ◇ ◇

友だちと遊んでいるうちに、一躍現実化の方向に話が進んでいく。子どもの世界の不思議さを改めて感じさせられた。今にもいきそうな、具体的な話なので驚いてしまったが、子どもたちだけに十分通ずる世界があり、イメージが豊かでない教師では、その中に入っていけない何かがあるような感じがした。

(五歳児 六月十一日)